

# 『門』のプレテクスト

——『奥州安達原』を中心に——

佐々木 亜紀子

『門』というテクストには、実に多くのプレテクストがちりばめられている。文学テクストに限っても、たとえば宗助の散歩中に「露国文豪トルストイ伯傑作『千古の雪』と云ふ」広告(二の一)があり、本屋には「History of Gambling (博奕史) と云ふ」本(二の二)がある。また禅に関するテクストでは、「碧巖集」「禅関策進」(十八の六)、「宗門無尽燈論」(二十の二)などの書名がみられる。

そしてほかに、テクスト言説に書名が現れないものでも、はつきりとプレテクストの存在が認められる語句もある。「風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団」(五の二)の『禅林句集』、「間の土山雨が降る」(十四の三)の『丹波与作待夜のこむろぶし』、「此垣一重が黒鉄の」(十六の一)の『奥州安達原』、「道は近きにあり、

却つて之を遠きに求むといふ言葉」(二十一の一)の『孟子』など、枚挙にいとまがない。

これらの多くのプレテクストは、書き手の読書体験などを通して、『門』というテクストに生かされるべく置かれたものである。同時にそれらのプレテクストは、読者に〈読み〉を要求しているはずである。たとえば先に挙げた『奥州安達原』は、坂井が宗助に贈った「裸人形」に付けられた「書付」の典拠である。書き手はもちろん、この挿話を記すにあたって、『奥州安達原』という浄瑠璃の舞台なり、文脈なりを思い起していたであろう。ゆえに読み手もまた、この浄瑠璃の一節に書き手と同じプレテクストを彷彿することを、テクスト言説は求めていると言つてよいだろう。

しかしながら、ここに『奥州安達原』がなぜ持ち出さ

れたのか。従来この点に関しては、論じられていない。そこで本稿では、『奥州安達原』を中心に、『門』におけるブレテクストが、いかに生かされているか、いかにテーマと関わりをもつのかを考察し、新たな（読み）の可能性を模索したい。

—

まず本文で、『奥州安達原』の一節が出てくる場面をみてみよう。

其晩小六は大晦日に買った梅の花の御手玉を袂に入れて、是は兄から差上げますとわざ／＼断つて、坂井の御嬢さんに贈物にした。其代り帰りに、福引に当つた小さな裸人形を同じ袂へ入れて来た。其人形の額が少し欠けて、其所丈墨で塗つてあつた。小六は真面目な顔をして、是が袖萩ださうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。（中略）小六は袂を探つて其書付を取り出して見せた。それに「此垣一重が黒鉄の」と認めた後に括弧をして、（此餓鬼額が黒欠の）とつけ加へてあつたので、宗助と御米は又春らしい笑を洩らした。

（十六の一）

これは正月二日の雪が、まだ乾きらない翌日、すなわち三日の晩の出来事である。坂井の認めた書付の洒落に、宗助夫婦は「春らしい笑」を洩らしている。だが書付けにある「此垣一重が黒鉄の」は、『奥州安達原』で「袖萩祭文」と呼ばれる、最も哀切な場面であることは留意すべきである。読み手は宗助夫婦の「春らしい笑」の奥に、袖萩の哀咽を聞かなければなるまい。

『奥州安達原』を繙いてみよう。「袖萩祭文」のある第三段では、雪の降る中に盲目となつた袖萩が登場する。袖萩は父平直方たいらなおかた儼杖げんじょうの許さぬ結婚をして家を出、落ちぶれて盲目となつている。偶然にも平直方は零落した娘と出会うが、娘の袖萩は盲目であるために、父と知らぬままに別れてしまう。そのあと、袖萩は「儼杖様げんじょうさまの一大事、ア、氣遣はしや」との声を聞き、心配のあまり娘のお君に手をひかれて、父母のいる屋敷までやつて来る。

只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間になほす白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは血筋の縁。  
（中略）儼杖様は此春から、主のお屋敷にはござらず、此宮様の御所にと聞いて、どうやらかうやら爰まで来た事は来たけれど、御勘当の父上母様、殊に浅ましい

此形で、誰が取次いでくれる者もあるまい。お目にかゝつて御難儀の、様子がどうぞ聞きたや」と、さぐればさはる小柴垣。「ム、爰はお庭先のしをり門、戸をたゞくにもたまゝかれぬ不孝の報、此垣一重が鐵の門より高う心から、泣く聲さへも憚りて、寶戸に喰付き泣き居たり。

袖萩の置かれた状況は、親の許さぬ結婚を契機にした勘当と零落である。そして宗助もまた「廃嫡に迄されか、つた」(四の九)に過ぎないにしても、結婚が原因で野中家を出たのである。没落の度合いに差こそあれ、袖萩と宗助は無関係ではあり得ない。いやむしろ、家を出た末、落ちぶれて下級役人として、経済的逼迫のなかに暮らす宗助の典型として、袖萩が提示されているといえるのではなからうか。

また先に引用した「袖萩祭文」と、「門」の十六章とを比べてみると、「梅」、「雪」というモチーフの共通項があることもわかる。「袖萩祭文」の引用部分にも「白梅」の語があるが、ここでの「白梅」は非常に重要なモチーフである。というのは、袖萩がかけつける父の元へは、その前に桂中納言教氏が「雪より白き白梅一枝」をもつて現われ、「鶴を打つたる科人、外が濱の南兵衛」と「梅

花の問答」をしてからである。桂中納言教氏は、実は阿部頼時の長男貞任で、袖萩の夫であり、南兵衛はその弟宗任である。このような場面の直後であるからこそ、先の引用部分に「白梅」の語が出てくるのである。ゆえに、坂井が「裸人形」に「袖萩」という名を付けるという「趣向」(十六の二)を思いついたのは、小六が持っていた「御手玉」の「梅の花」に誘発されての事だった可能性もあろう。折りしもこの坂井家でのカルタとりの前日には雪が降っており、雪の中の哀切な「袖萩祭文」の一節は、時節にあった「趣向」だったのだ。

そしてもうひとつ、「しをり門」が「袖萩祭文」の場面にあることは、注目すべきである。この「門」のモチーフについては、既に石崎等が「ちよつとした遊びとはいへ、ここにもテキストの奥に〈門〉のイメージが潜んでいる。」と述べている。だが袖萩が立つこの「しをり門」には、「〈門〉のイメージ」以上のものが読み取れる。袖萩が「しをり門」の前に「泣き居」る姿は、「門」の次の部分を想起させる。

彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて来たものらしかった。夫は是非もなかつた。けれども、何うせ通れない門なら、わざ／＼其所迄辿り付くのが

矛盾であつた。(中略)彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。(二十一の二)

「長く門外に佇立<sup>た</sup>むべき運命をもつて生れて来た」宗助と、先の袖萩の姿は酷似しているといえよう。宗助の参禅の失敗を語つたこの箇所は、「門」のなかでも、宗助の〈生〉の有り様を知るための最も重要な言説のひとつである。「門」という題名を中核に据えて、「門」という作品のテーマを考えるならば、それはひとつに「長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて来た」宗助という男を描くことだといえる。とすれば、テーマを語つたその言説を、あたかも具象化したごとき、袖萩のエピソードは、非常に重要な符牒といえるのではなからうか。

またテクスト言説には、もともと「此垣一重が黒鉄の」という一節があるのみであつて、これに続く「門」という、題名と同じ語は記されていない。この不自然さには、「門」という文学テクストを書きすすめている作者漱石の恣意性が感じられる。そして「門」という題名を、毎回小説の最初に読む当時の新聞読者も、ここに「門」というモチーフを読みとつていたのでなからうか。

## 二

「長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて来た」宗助が、参禅を失敗するということについては、他のプレテクストに関連して、三好行雄が次のように述べている。

〔風吹碧落浮雲尽 月上青山玉一団〕という法語は、「聃頌集」に見える。「禅林句集」や「禅語字彙」にも収めるが、たとえば「禅語字彙」の意解には〈迷妄の浮雲尽き、心月大空に輝く意。碧落は天の義〉とある。句の直視する風景と、解の釈義する心との距離はここにもあつた。このさりげない挿話によつて、のちの参禅の失敗が予告されている。

歯科医の待合室で、宗助が手に取つた『成効』という雑誌にある「風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団」(五の二)という二句についての指摘である。宗助にとつて『成効』という雑誌名そのものが、元来「非常に縁の遠いものであ」る上、「彼の生活は実際此四五年來斯ういふ景色に出逢つた事がなかつた」ことから、三好はここに参禅の失敗の予告を読み取つていたのであ

る。そして三好は宗助の参禅を、「小説の脈絡にかたをつけるための唐突な収束」とする谷崎潤一郎<sup>⑧</sup>を代表とする意見を退けて、「それなりの伏線はあった」との見解を述べている。首肯し得る意見であり、プレテクストの意味から説明しているのは、特に興味深い。メイ・プロットからは一見はずれたようなプレテクストを用いた挿話群を、見なおす必要があることも考えさせられる。

### 三

【門】の中の【奥州安達原】が引用されている部分が、参禅を失敗して「門」外に立ち竦む宗助の姿に酷似していることは、既に述べた。ここでは、その「門」というモチーフをもつ、別のプレテクストについて述べることにする。

そのプレテクストとは、『丹波与作待夜のこむろぶし』である。まず【門】の本文から見よう。

安井は笑ひながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは淨瑠璃に間の土山雨<sup>つちやまのあめ</sup>が降るとある有名な宿<sup>しゆく</sup>の事であった。朝起きてから夜寐る迄、眼に入るものは山より外

にない所で、丸で播鉢の底に住んでゐると同じ有様だと告げた（中略）。宗助はそんな播鉢の底で一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考へた。

### （十四の三）

安井が話す「間の土山雨が降る」とは、近松門左衛門作の『丹波与作待夜のこむろぶし』の「上之巻道中双六」末尾の一節である。

あらずじを確認してみよう。あることから夫とも一人息子とも別れている滋野井は、由留木家の息女、調の姫の乳母となつてゐる。そして姫の婚家先へ、幼少の彼女に伴つて行くことになつてゐた。しかし姫は出発の間際になつて洩りだし、行こうとしない。そこで呼び出された「三吉」という馬子が、偶然にも滋野井の息子の「与之介」だったのである。

御乳も今はあぐみ果て。「どふしてよからふ」御家老もあきれて。こそはゐられけれ。

お仲居のわかなは旅出立に菅笠持つて門外より走り入り。「なふお乳の人様おもしろいことがござります。十ばかりの剃下げのちつぽけな馬方が。道中双六とやら東海道の絵をひろげ。あぢなこととして遊びます。御

機嫌直しにお目につけなされませ」。(中略)「お許し  
じやその丁稚に。持つて参れと呼ふでおじや」。「心得  
ました」と御門に出立立ちへ来たる馬方が片肌脱いで。

こうして「門」から連れられてきた三吉と、母滋野井  
とは再会するのである。しかし姫と馬子が乳兄弟とあつ  
ては、姫の結婚の妨げになるとの思いから、主家への義  
理と、子への情愛とに引き裂かれながらも、滋野井は三  
吉に母との名のりを上げない。

与作が子とばし言やんなやサア早ふ御門へ出や。ア、い  
か成因果な。生れ性。(中略)「先早ふ出てくれ」と泣  
くく言へば三吉。ア、母様あんまり遠慮過ぎました。  
先言ふて見て下され」

こうして滋野井は母と名のれないままに、機嫌を直し  
た姫の行列に加わつて出発をすることとなる。その出発  
と共に、悲しみに暮れる三吉が「坂は照るく」。鈴鹿は  
曇る。土山あひの。あひの土山雨が降る」と馬子唄を歌  
い、「上之巻」は終わる。

【門】の本文では、この母子の別れの場面に歌われる  
三吉の歌が安井の話のなか出てくるのである。この歌が

「有名な」といわれるのは、母子の別れの場面が好評で  
あつたからであるが、この母子の出会いと別れが、「門」  
を潜ることによつて表現されていることに注目したい。  
「門」とは本来〈出会いと別れの場〉なのである。

作者漱石が「門」という題名で作品を書き始めたころ、  
「題は門といふので、森田と小宮が好加減につけてくれ  
たが、一向門らしくなくつて困つてゐる。」(明治四十三年三月四日付け)という書簡を寺田寅彦に送つたことは  
よく知られている。ちょうど題詠のように、与えられた  
「門」という題に作者漱石が思索をめぐらしていたこと  
がわかる。そういう作者が、「門」執筆の只中で、〈門〉  
という物象の根源に思い至らなかつたというのも考えに  
くいのではなからうか。それならば、〈出会いと別れの門〉  
がある場面として、安井が「或友達の故郷の物語をし」  
たという挿話は、看過できないものとみなされよう。

そもそも安井がこの「或友達の故郷の物語」を宗助に  
したという事は、非常に皮肉な側面をもっている。若き  
宗助はこの「土山」の話に対して、「そんな播鉢の底で  
一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考へ  
た」(十四の三)。だがのちに宗助は、この安井から御米  
を奪い、「播鉢の底」に似た「崖下」の陰気で、「小路の  
泥潭」の乾かない「一世紀がた後れ」(十六の一)た場

所に棲まうことを余儀なくされるのである。

また『丹波与作待夜のこむろぶし』の「中之巻」には、先述の『奥州安達原』と同じ「鉄の門」という句が出てくる。それは滋野井の元の夫である与作が、「小まん」とともに死のうとしたときの次の言葉にある。

「ア、く小よしは逢ふ夜の通ひ窓。最期近づく二人に  
は冥途に通ふ鉄の門」と。くどきく馬引き出し

この「鉄の門」については、『新日本古典文学大系』の脚注に「地獄の門。」とあり、『今昔物語集』の地獄の風景が記された箇所引用がある。つまり「鉄の門」とは、大きく強固な門の比喩であるだけでなく、此岸と彼岸を分ける、それも地獄への入り口との意味をもつ門であることがわかる。もちろん『奥州安達原』における「鉄の門」が、地獄への入り口というニュアンスをもっていたというのではない。ただ「鉄の門」にそのようなイメージが付随していたことは、『丹波与作待夜のこむろぶし』を引用した作者漱石にとつて、周知のことだったろうということがある。また地獄への入り口としての〈門〉といえ、『倫敦塔』<sup>(12)</sup>にもある。

門、入つて振り返つたとき

憂の国に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。

(中略)

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた。

『門』において〈門〉とは、「山門」のみならず、〈出会いと別れの門〉であり、〈地獄への門〉でもあつたはずである。この意味から、宗助が御米と二人だけで初めてことばを交わした忘れがたい風景が、「門」の前であつたことは、非常に示唆的であることがわかる。

以上のように、『丹波与作待夜のこむろぶし』の引用された挿話に注目すると、その挿話のもつアイロニカルな意図と、〈門〉というモチーフの意味とが見えてくる。

#### 四

ここで挙げた『門』における三つのプレテクスト、すなわち『奥州安達原』、『禅林句集』、そして『丹波与作待夜のこむろぶし』は、宗助がそれらの言説に拘泥しないことから、彼が、「文芸にも哲学にも縁のない」(十七

の(一)人間であることを印象づける。と同時に読み手には、テクストの奥に別の風景を読み取ることを許している。

宗助夫婦が「春らしい笑」を洩らす『奥州安達原』の一節に、読み手は袖萩の哀咽を聞き、「長く門外に佇立<sup>たて</sup>むべき運命をもつて生れて来た」宗助の姿を予見することができ。また宗助が読み捨てた『成効<sup>なり</sup>』に、悟りに辿り着けない宗助とは反対の境地を味わうことができ。そして「笑ひながら」安井の語った「丹波与作待夜のこむろぶし」にある「土山」の話に、哀しい馬子の調べを聞くことが許されるはずである。

特に『奥州安達原』は、『門』のテーマとの関連性が高いことを、重ねて強調したい。

まず第一に、親から勘当されて零落した袖萩は、宗助の典型として提出されているということである。第二に「梅」、「雪」、そして特に「門」、というモチーフの共通項が見られることである。第三に「しをり門」の前に立ち竦む袖萩の姿は、宗助と酷似していることである。そこに三好論とあわせて、参禅を「唐突だ」とする意見を退け、『奥州安達原』の挿話の重要性を読みとりたい。そしてこの挿話を重要視することは、「此垣一重が黒鉄の」という書付けを贈った坂井という人物の意味

を読みかえていくことにもなる。

以上のように、『奥州安達原』とは、『門』という題をめぐる作者漱石の思念から紡ぎだされた(門)の物語として、『門』のテーマとの高い関連性ゆえに持ち出されブレテクストであったのである。

#### 注

- (1) 『門』の引用は、『漱石全集 第六卷』(岩波書店、一九九四・五)による。ただし、振り仮名は適宜省略した。
- (2) 各段の中にある名称は、『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三・一〇)を参考にした。
- (3) 『奥州安達原』の引用は、『有朋堂文庫浄瑠璃名作集 上巻』(有朋堂書店、一九三四・六)による。ただし、旧字体は新字体になおし、振り仮名は適宜省略した。
- (4) 注(2)参照。
- (5) 石崎等『岩波文庫「門」注』(岩波書店、一九九〇・四)
- (6) 小森陽一は「解釈——漱石テクストの多様な読解可能性」(『知の技法』所収、東京大学出版会、一九九四・五)のなかで、『それから』の題名について、「この題名は毎日毎日読者の眼の前に必ずあらわれ



るわけで、(中略) 解釈をめぐる強い枠組になって  
いた」と述べている。

- (7) 三好行雄「門」のなかの子ども——「門」再説(『三好行雄著作集 第二卷 森鷗外・夏目漱石』所収、筑摩書房、一九九三・四)

- (8) 三好行雄は、谷崎潤一郎の「門」を評す(『新思潮』明治四十三年九月)と、正宗白鳥「夏目漱石論」(『中央公論』昭和三年六月)とをあげている。

- (9) 『丹波与作待夜のこむろぶし』の引用は、『新日本古典文学大系91 近松浄瑠璃集上』(岩波書店、一九九三・九)による。ただし、振り仮名は適宜省略した。

- (10) 「上之巻」との名称は、『(旧) 日本古典文学大系49 近松浄瑠璃集上』(岩波書店、一九五八・一一)を参考にした。

- (11) 書簡の引用は、『漱石全集 第二十九巻』(岩波書店、一九五七・七、新書版)による。書簡番号は一〇九〇番。

- (12) 『倫敦塔』の引用は、『漱石全集 第二巻』(岩波書店、一九九四・一)による。ただし、振り仮名は適宜省略した。